

もう一つの五輪

パラリンピック

ソチで開催の冬季オリンピック。3月7日にはパラリンピックが始まります。あまり知られていない競技の見どころを紹介します。

前回はバンクーバー大会での日本選手のメダル数
 最高の1位は、短距離スキーの日本選手

史上最強チーム 滑降、スーパー大回転など

日本勢のメダルに大きな期待がかかっています。滑降(ダウンヒル・DH)、スーパー大回転(スーパー-G・SG)、大回転(ジャイアントスラローム・GS)、回転(スラローム・SL)、複合(スーパーコンビ・SC)の5種目のほか、スノーボードクロスがソチから追加されました。



華麗なテクニック
 チェアスキーヤーがボールを倒すなんて、かつては考えられなかった。ところが現在は、ボールに体当たりして華麗なターンを叩き出す。前日本選手(写真上)にいたってはアウトリガーでボールを倒し続けるテクニックをマスター。この技術を持つ選手は世界でもあまら少ない。

チェアスキー 用具は?—一座位の適合—
 1本のスキー板で自在に斜面を滑走する。シート、選手の身体にフィット。ブレード、雪を蹴りとらえるので、バランスを取りやすい。

リフトアップレバーで高さを選択し、自力でリフトに乗れる



時速100キロのスピード
 時速100キロのスピードが出る滑降。強い空気抵抗を感じ、視界は狭くなる。このため、試合前のコース・インズペクション(下見)でそれを見越して、目印を決めておく。勝負は滑る前から始まっているのだ。

アルペン ノルディック

筋肉 トレーニング
 選手たちは年間を通じてトレーニングに励んでいる。仕事の後、ダンベルを手に筋肉を鍛え、用具のメンテナンスをする。秋以降はワールドカップ遠征などを行い、海外で練習することが多くなる。

めざせ表彰台独占
 森井大輝(富士通セミコンダクター)、袴野高(写真上)、鈴木遥史(関谷大学)の3選手がアルペン種目の最強陣を築く。森井選手はワールドカップで2012年、日本人初の総合優勝を果たした。袴野選手も2位、ソチでの日本勢の表彰台独占も夢ではない。

氷上の格闘技 アイススレッジ・ホッケー
 若狭健吾と岡田直樹など下級に属している選手が「スレッジ」と呼ばれる専用ソリに乗って戦います。1チーム6人ずつ、1ペリオド15分、3ペリオド合計45分の3試合が行われます。ソチの出場枠を獲得しています。



3カテゴリー制

アルペン種目ではかつて障害の部位や程度によるクラス分けを採用。クラスの数だけ金メダルが与えられた。しかしソチ大会以降、立位(立って滑る)、座位(座って滑る)、視覚障害者の3カテゴリー制を導入。メダルはカテゴリーごとに与えられることになった。



障害の程度により「係数」

同じカテゴリーでも障害の程度はさまざま。障害の程度に応じた係数を実タイムにかけた上で順位を決め、公平性に配慮している。

障害の程度%	係数	計算	順位
B1(障害重)	87%	100×0.87=87秒	1位
B2(弱目より少し障害重)	98%	100×0.98=98秒	2位
B3(弱目)	100%	100×1=100秒	3位

大会における金メダル数

ソルトレーク(2002年)	92個
トリノ(06年)	58個

雪原マラソン クロスカントリー



クロカン王子
 (左) 藤本一選手(イェイベックス) 生まれつき左手首から先がない。ニックネームは「クロカン王子」。[金]をスキーに選いだ。ソチへの出場も確定的。クロスカントリーとバイアスロンに出場予定。名古屋出身。

被災地の期待を背負って
 阿部夏実選手(福岡県高校) 出生時に左腕が不自由になった。選手福山町出身。東日本大震災の津波で生まれ育った自宅を失った。県内の高校に通いつつ、ソチへ。「東北が元気になるような結果を出したい」。

用具は?—一座位の適合—
 シットスキー
 クロスカントリーやバイアスロンに使用される。前に進む動力は腕力。軽いはずスピードが出るので、シンプルな構造になっている。

課題
 競技環境の向上に向けた課題は山積しています。パラリンピックは、もはや選手個人の努力だけでメダルに手が届く大会ではありません。国の全面的なバックアップが求められています。

テレビ中継は?
 NHKは開会式を生中継するほか、大会中は毎日30分程度の「ダジェスト番組」を総合とEテレで放送。スカパー!は専門チャンネルを開設し、生中継60時間を含む200時間以上の放送を予定している。



動と静の競技 バイアスロン



30秒ごとに1人ずつスタートする。障害に応じた係数もあるため、スタッフ陣が専用ソフトで計算し、2位、トップと10秒差」など」と声をかけ、一見、個人競技だが、たぐも人の力に支えられて動いている。

用具は?—一座位の適合—
 シットスキー
 クロスカントリーやバイアスロンに使用される。前に進む動力は腕力。軽いはずスピードが出るので、シンプルな構造になっている。

課題
 競技環境の向上に向けた課題は山積しています。パラリンピックは、もはや選手個人の努力だけでメダルに手が届く大会ではありません。国の全面的なバックアップが求められています。

選手が苦労したこと

費用がかかる	0
練習場所がない	10
コーチ、指導者の不足	20
仕事に支障が出る	30
不安定な資金源	40
心理的強化	50
練習場所へ通うのが大変	60

1年間に個人負担する費用

冬季	206.3万円
夏季	129.6万円

●制作: 東京本社サンデー編集部 石井友恵
 ●取材協力: 井田朝宏氏(日本障害者スポーツ協会)、堂井秀樹氏(日本代表監督)、鈴木遥史氏(関谷大学)、伊藤敦氏(INPO法人STAND)ほか
 ●写真提供: ◆=日本障害者アルペンスキーチーム「ASD」、★=イェイベックス、●=有限会社エックスP
 ●出版: 朝日新聞「寝たが壊れる」(大日方邦子著、NHK出版)、文芸春秋「寝たが壊れる」(大日方邦子著、NHK出版)ほか

リハビリから超エリートスポーツへ

パラリンピックとは、身体障害者からの国際スポーツ競技大会。冬季と夏季それぞれ4年に1度、五輪開催都市で行われます。原点となる大会は、第2次世界大戦後に傷病兵のリハビリを目的に開かれました。現在は、障害者スポーツの最高峰の大会としてエリート化が進んでいます。



命名したのは日本人。パラリンピックという言葉は1964年、東京五輪後に開かれた第1回国際大会の変種として考案された。日本人が「両下肢まひ者(パラレジア)のオリンピック」で「パラリンピック」と命名したと考えられている。現在は五輪との一体化が進み、「もう一つの(パラ)五輪」という意味で使われている。

失ったものを数えるな 残されたものを最大限に活かせ

可
 個性にチャレンジングなことを示すことで、私たちが多くの人に勇気を与えることができる。

飛躍的に高まる競技性
 大日方邦子
 初のパラリンピック出場した1994年リレハンメル大会
 ・当時、トップ選手だった選手、リカのサウーウィル
 選手からは、手や足など身体機能の一部が使える選手たちが、

せん、グッドマン博士の言葉のとおり、残された才能」をフルに駆使して、「失ったもの」を補うために努力を続けているのか、それぞれの選手は挑戦や工夫を凝らしている。

こうしたさまざまな努力の積み重ねが、このとき、時を越えて高速度で雪山を滑り降りることができるようになった。

近年、パラリンピックの競技性は飛躍的に高まってきている。選手を取り巻く競技環境も変化しています。選手が苦労したこと